

ICT の ICT による情報発信 ——編集の立場から——

編集理事 今井 浩



21 世紀に入って、科学技術の情報発信はインターネットを通してグローバルになされるのが大勢となった。それを実現したのは、一重に本会が推進する電子情報通信の技術 ICT の力である。本会が広く世界を土俵に活動している今、その学会活動が実は ICT によって振り回されている側面があるかもしれない。一方その課題の解決の突破口は最先端 ICT 活用にあるのではという推論も交えつつ、現状を簡単にまとめながら見てみようと思う。

会員に毎月配布されているこの会誌には本会の海外セクション活動等を広報するための Global Plaza という英文ページも含まれており、海外在住の会員（現在全会員の 1 割弱）に対しても均等に情報発信するべく、国際委員会／国際企画タスクフォースの尽力で Global Plaza に関する部分についてはインターネットで公開されており、国際活動においては ICT を最低限活用しているといえる。ただ、会誌全体の pdf は保持しているものの、その公開はまだ実現していないのが現状だ。ここには ICT を活用した学会活動の余地が十分にあり、学会全体では編集に限らず本会 Web 全体の改革プロジェクトをキックオフしている。会誌には学会としての見識をもって記録される記事からタイムリーなトピックまで様々な有益な情報が掲載されているが、それを柔軟に発信する仕組みは現在ない。

論文誌については、和英論文誌 8 誌が電子化されて会員向けインターネット公開されており、電子ジャーナルのみの ELEX, NOLTA, 立ち上げ中の ComEX が特定分野の速報誌・専門誌として発行されている。和英論文誌 8 誌はまだ冊子体を発行しているものの、費用の点からも価格を相応にしており、アクセス権については、論文誌は個人会員への ID, パスワード、団体会員である国内購読機関にサイトライセンスを提供している。一方、海外を含めた会員以外の読者へは冊子体あるいは電子ジャーナルを提供をしている。ELEX, NOLTA 電子ジャーナルは、現状ではオープンアクセスであり、掛かる費用は著者負担のビジネスモデルで実現している。なお論文誌は本会著作権規程により著者所属機関の機関リポジトリに公開できる点でオープンアクセスを担保している。おおむね、国内の学協会としては電子ジャーナルによる学会運営について高いレベルにあるといえる。しかし、課題は ICT に基づいて判断する場合、国際的に見てどの程度の水準にあるか、である。

昨今主流のインターネットによる論文検索に対処し、現在 Google Scholar 等の学術情報検索と連携をとる試みをしている。本会の論文誌公開システムも構築以来 10 年強たっており、学会全体の学術情報（研究会・大会・国際会議等）も含めたシステムへと一新する必要がある。先行している国際的な他学協会の ICT を活用した活動との位置付け・連携・差別化も課題だ。国際的に寡占が進む商業学術出版社は、SGML でブラウザ直接表示、補足資料としての種々メディア提供、電子書籍として携帯端末での購読も可能な新形態の論文の模索も含めた施策で学術情報出版の囲い込みを行っている現状に対して、本会としていかに独自性とインパクトがある学術・技術情報の発信をできるかが肝要な問題である。冊子体の保存に対して、電子版論文の永続的なアーカイブ方式も課題であり、そこには自然災害等への対策ももちろん含まれる。学会発行論文の著作権活用・運用についても、学会会員そして電子情報通信分野を推進する人々にとって更に有益な形態が模索されるべきである。

本会論文誌に論文掲載する著者の立場からすると、現代の評価第一の時代において、当然のことながら掲載された論文がより多くの研究者に評価され、引用されることのインパクトを高めたいわけで、上述の本会の取り組みはボトムラインとして着実にやっているわけだが、実はこここそが ICT の ICT による情報発信ともいえるだろう。学会全体として本会の論文 Web 公開を通して日本そしてアジアに軸足を置いた本会論文誌が広く世界でインパクトを与えられるよう推進していくことが重要である。ICT の優れた研究開発の成果を上げるだけでなく、それを本会ならではの ICT 活用によって広く周知するために是非会員の皆様のお知恵を拝借したい。